国労はかた

NO.144

2021.5.6

国鉄労働組合博多地区本部
責任者／中村和浩
編集者／教宣部
事務所/博多駅東2-18-28
ジェントリー博多 201

肥薩線現地視察に行ってきました

４月２０日、九州本部主催で昨夏大雨に襲われた肥薩線の被害視察が行われました。九州の人気鉄道路線である肥薩線は２０２０年７月の豪雨で鉄橋や線路が流されるなど甚大な被害を受けました。現在、八代駅（熊本県八代市）と吉松駅（鹿児島県湧水町）のあいだ８６．８Ｋｍで不通になっています。我々としては、１日も早い復旧を願うばかりです。

青年のひとりごと

ファシズムという言葉は誰もがご存知かと思います。これは、イタリアの独裁者ベニート・ムッソリーニが創設した政党「ファシスト党」による政治運動で、多くの人々の人権を踏みにじり、尊い命を奪ったネガティブなイメージとして定着していますが、この言葉がラテン語の「ファッショ（fassio）」（結束）に由来するように、本来は、人々を団結させ理想的な社会を実現する目的で始められた運動です。「みんなで力を合わせて良い社会にしよう」ということで、なんだか高尚に感じますが、こうしたフレーズの裏には、「みんなと協力できない反社会的な者は許さない」という「同調圧力」が込められています。実際、この運動は、「理想の社会」をつくる上で都合が悪い人物や言論は弾圧しても構わないという過激思想のもと、歴史的大惨事につながりましたが、これは現代にも通ずる「人間の性」であって、「対岸の火事」などではありません。「社員一丸となって会社存続の危機を乗り切ろう」。よく似ていますね。タチの悪いことに、会社は、まっとうな努力はせず、センスなき「コスト改革」で一人勝ちの利益を得るため、コロナ禍で会社が「存続の危機」にあるという恐怖を過剰に煽ることで、「会社が存続して雇用が守られるのなら、黙って協力しよう」といった「空気」を社員間に共有させようとしています。そこには、論理も整合性も一切ないのですが、これが深刻化すると、会社の意向に従わない者は、「会社を潰そうとする異端者」として同じ社員らに糾弾されるといった足の引っ張り合いにまで発展し、誰もが「集中砲火」を避けるため、「みんな」と同じ行動、つまり、会社の暴走に加担する言動を取るしかなくなります。このことが多くの悲劇を生み出すのは言うまでもありません。相も変わらず、会社の欺瞞を指摘した際、ほぼ間違いなく、「何を言っても会社の方針は変わらない」という回答が返ってきます。ズレていますね。変えなければならないのは、社員自らが作り出している「空気」の方なのに。

○当面する行動

○　５月１９日（水）１８：００～/戦争法・共謀罪反対集会　天神パルコ前
○　５月２１日（金）１８：３０～/憲法講演会in福岡　福岡市科学館サイエンスホール